

# 言葉から社会を考える

言葉は何のためにあるのか？

言葉をギリギリまで考えていくと、どのようなことが言えるのでしょうか。

言葉のない世界を考えてみてください。きつとワケのわからない大変な状況になるでしょう。でも、この世界にはもう言葉が存在しているから、「言葉がないとはどういう状態なのか」も、言葉を通じてしか考えられない。ということは、言葉がない世界を説明す



ることは不可能なわけです。

それだけでなく、「言葉がどんなに大事か」ということも、言葉で説明できません。

人間が生きていくのに「言葉がなくて困るか」と考えてみると、物理的には困らない。現に、動物は言葉がなくても、困っている様子はない。彼らを見ると、あれはあれで充実して楽しそうにやっている。言葉がなくても生命としては生きていけるんです。つまり、言葉は生命の役には立たないわけです。

ではなぜ、人間は言葉を獲得したのでしょうか。動物が何か困ったために、言葉を発明して人間になったなんて説明されますけど、それは都合のいいストーリーにすぎない。だって、動物は言葉がなくても困らないんだから。

そうだとすると、サルが困ったから言葉をつくって人間になった、のではなくて、人間はいつの間にか言葉を使うようになったとしか考えられない。

言葉は動物のためにはない。なぜだか知らないが、人間だけのためにある。もう一歩踏み込んで言うなら、「言葉は言葉のためにある」のです。わかりにくい言い方かもしれませんが、言葉は根源的には「何かのため」のものではない。言葉をどれだけ掘り下げて考えても、結局言葉の外には出られません。こうしたあり方を考えれば、「言葉は言葉のためにある」と言うのが、一番適切なのです。

「言語ゲーム」とは何か

さらに「言葉とは何か」を明らかにしていきましょう。

たとえば、言葉には意味がありますね。日本人が「ヤマ」と言えば、それは山のことで

三 言葉から社会を考える

す。名詞だけじゃなくて、「お金は大事だよ」とか「愛情は大切だ」という文にも意味があります。

でも、これは外国語で言えば、まったく違いますね。山を英語でいうと「Mountain」です。ですから、言葉と意味との結びつきには、自然法則のような法則はありません。山を「ヤマ」と呼ばなくてはいけない理由などないし、物理学や化学をいくら駆使しても、その答えは見つかりません。「山と呼ぶことに決めた人は出てきてください」と言っても誰も出てこない。答えはないんです。

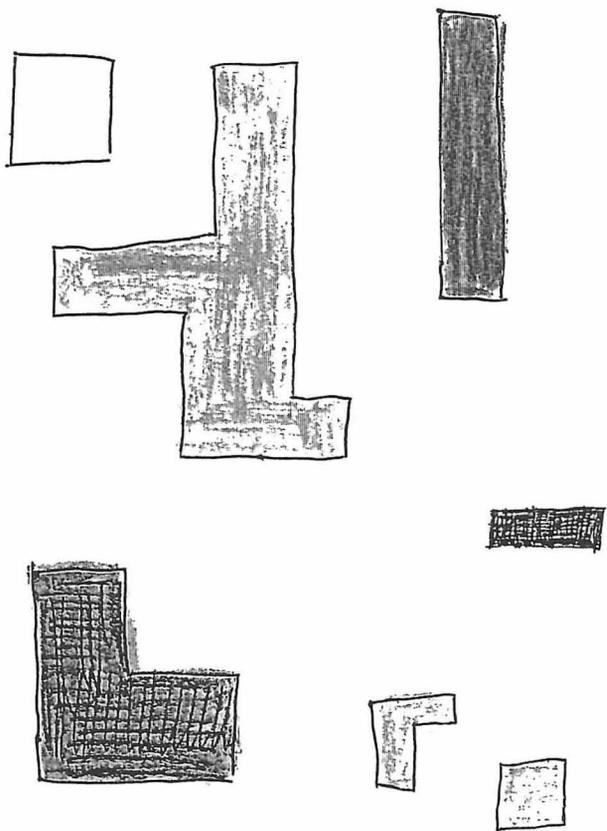
だからといって、テタラメに言葉を使っているかと言うと、そんなことはありません。日本人で山を「ヤマ」と呼ぶ人はいない。

じゃあ、どのように考えればいいのか。ヴィトゲンシュタインという哲学者は、前期と後期とでその思想が大きく転換した人ですが、彼は最終的には「言葉とはゲームだ」という着想に行き着きました。どういうことかと言うと、サッカーでも野球でもいいのですが、ゲームにはルールがありますね。言葉も同じようなものだと考えたわけです。

つまり、私たちは知らないうちに、言葉の用法(ルール)を学び、言葉を使っている。自然法則ではないけれど、気が付いたらルールに従っている。それが言葉なのだ。

「気が付いたらそうになっていた」という点は、自然法則と似ていますが、自然界や動物の間には言葉と同じような規則は見つかりません。人間だけにそういう特徴が存在している、そのルールに従って生きています。

たとえば、「お金」というのも言葉の一種で、「これでモノを買うことができますよ」という意味があります。さもなくば、お金はただの紙きれです。人々の間で「お金には価値



三 言葉から社会を考える



ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン  
Ludwig Josef Johann Wittgenstein  
1889-1951、オーストリア・ウィーン出身、20世紀最大の哲学者であり、言語哲学、分析哲学の創始者としても知られる。第一次大戦に従軍中、記号的な著作『論理哲学論考』を完成させた。その後、『想像主義』の生みの親となる。この著作はヴィトゲンシュタイン自身によって否定されることになる。死後に刊行された『ヴィトゲンシュタインの代表作』『哲学的探求』では、言葉の意味はそれが使われる状況から決定されるという「言語ゲーム」という概念を提唱した。

税金・資金の調達を第一の目的に租税として納める金銭のことで、共同社会を維持するための一種の会費。中世フランスには領主の睡眠を妨げるカエルの声を止める労役としての「カエル税」や、財政難に陥った財務長官が空気に税金を掛けようと試みた「空気税」など、歴史的にも国や文化背景によって多様なものがある。

値がある」という前提が作られ、とりあえずみんながそうふるまっているからこそ、意味が生まれるのです。

政治、経済、法、宗教も「言語ゲーム」だ

この「言語ゲーム」という考え方は、社会の仕組みを解き明かす原理として使えるのではないかと、というのが私の考えです。

人間は言葉を手にしたとたん、言葉によって自分たちの間柄を整理して、人間と人間の複雑な組み合わせをこしらえました。どれが誰のものを区別したり、親兄弟やもつと離れたつながりを整理したり、職業を何種類もこしらえたり。そうやって、政治や経済などが作り上げられていったわけです。

政治にも、法にも、経済にも、ルールがある。そうした社会を組み立てているルールは、どれも、重力のような自然法則とは違って、必然的なものではない。

つまり、社会は「言語ゲーム」でできているのです。

「言語ゲーム」は、法則ではなくてルールですから、変えられるし、変わっていく。「こゝろでしかあり得ない」と思えば変えられないけれども、そうではない。昔はなかなか変わりにくかった。それに対して、「ルールは変えられるものだ」と考えるのが、近代の特徴です。

たとえば法律は、近代以前は変わりようのないもの、「発見」すべきものでした。ところが近代になると、法律を作ることができるようになる。民主主義の国家では、議会の多数決によって法律を変えたり、新たに作ったりできる。今、日本でも皇室典範を変えよう

とか、憲法を改正しようとかいう話が出ていますが、そういう発想そのものが近代のものなのです。法律を変えることで、自分たちの社会を変えていくことができます。

宗教も「言語ゲーム」の典型的な例です。イスラム教のはじまりは、預言者ムハンマドが神からの啓示を受け、新しいルールを提案して「この指とまれ」とゲームを始めたことでした。アラブの神が実在したから、イスラム教ができたわけではなく、彼らにとってアラブの神が実在するようになったのです。しかも宗教は、信仰ですから、そのゲームに参加しても、参加しなくてもいい。そういう意味でも、まさに「言語ゲーム」ですね。

「言語ゲーム」の考え方を下敷きにする、どういふふうな社会ができるのか、経済活動が営まれるのか、法律が守られるのかなど、社会の全体をうまく理解することができます。というのも、人間と人間との関わりが、すべて言葉によって組み立てられているからです。

文字によって複雑化する社会

ところで、文字が発明されることで、社会は大きく変わります。

文字の特徴は「記録したら変わらないこと」です。文字がない社会（無文字社会）では適当にルールを忘れてリセットすることもできます。でも、記録が残っていると、そうはいきません。文字ができると、言葉の用法はますます複雑になる。言葉が複雑になると、社会が複雑になるといえることです。

文字の用途の一つは、税金をとることでした。税金というのは不思議なもので、本人の



7世紀前半、インド商人のムハンマド・イブン・アブドゥル・ワッラーフがメッカ郊外のヒラー山中の洞窟で神（アラブ）の啓示を受けたと信じられている世界三大宗教の1つ、中東・北アフリカ・南アジア・東南アジアに信者（ムスリム）が多い、啓示を霊感したコーランを教典とし、信じるもの対象や、行動規範を定めた「六信五功」をもつ唯一神教で、偶像崇拝を厳禁に排除するも特徴。アラビア語で「イスラーム」は「神への帰依」「ムスリム」は「帰依する者」を意味する。

無文字社会

文字を持たない社会のことで、世界に居住する人が話す言語が8千〜1万語であるのに対し、文字を使用している言語は、そのうちのわずか8%といわれる。無文字社会の人々は一般に、文字の代わりに口頭での伝達、口語りなどの能力が優れているとされ、アイヌ民族もその一つ。通説では、人類の歴史は500万年ともいわれるが、文字の歴史はわずか5千年ほど。

政府・立法・司法・行政のすべての作用を包含する国家の統治機構の総称。日本の場合は内閣および内閣の統轄する行政機構のこと。

国家・一定の領域に定住する人々からなる、統治権をもつ政治的な共同体。形態・役割は歴史的に異なるが、領域、人民、権力が近代国家の三要素とされる。

同意なしに一方的にモノを持って行ってしまふ。泥棒と一緒にです。ただ、持っていく相手が個人であれば泥棒で、団体であれば税金になるんですね。

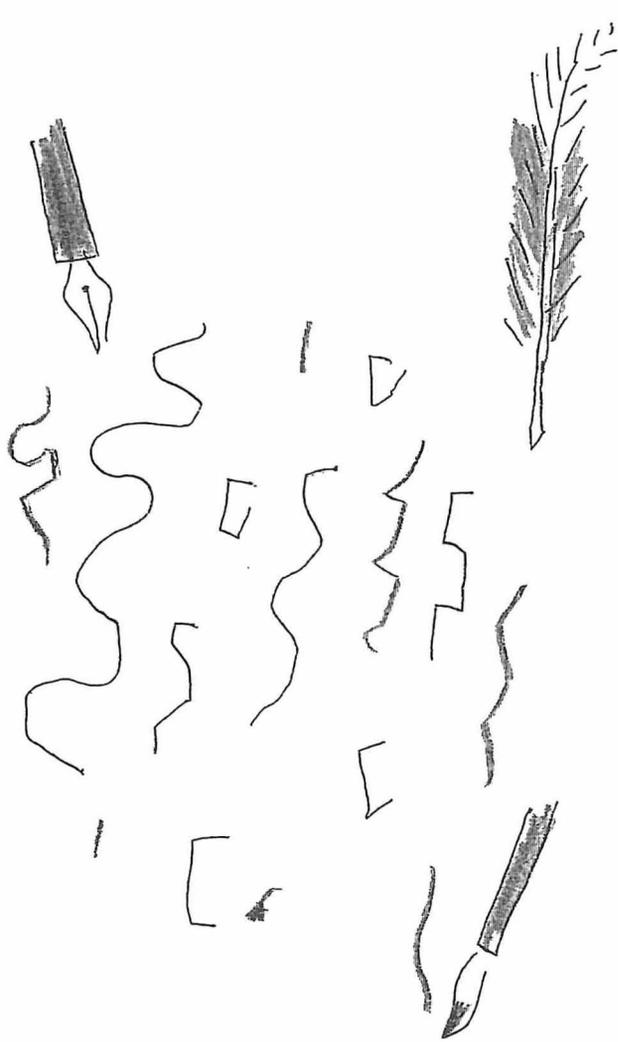
「誰でも自由に通れる」ことです。どんなにひどい階級社会でも、道路はあると思いますが、そこは誰が通ってもいい。じゃあ、みんなのものである道路を、誰が維持管理するのか。それが、国家であり政府です。どんな社会にも必ず、みんなを使う公共のものがある。そうした公共のものを維持するために、税金が必要なのです。

さて、税金を集めるときに、文字がないということになるか。

アフリカなどの無文字社会では、社会全体が親族のネットワークで構成されています。マタイトコは誰それさんとか、誰それの息子のお嫁さんの妹さんとか。無文字社会は、複雑な親族関係を表す名称法がとて発達しているのですが、親族のネットワークを超える、それ以上の社会を維持できなくなります。親族でもない、見ず知らずの人から税金を集める方法がないのです。

そこで、王様が出てきます。王様というのは、自分の親族以外の人々も支配する存在です。そうすると、そうした人々からもちゃんと税金を貰ったかどうか、チェックしないとイケない。そこで記録が必要になるんです。誰からいくら貰ったかなど、取りはぐれがないように台帳につけていくわけです。はじめは名前や数字だけだったのが、ついでにこれこれ記録しておこうと、文書の中身が増えていく。王様の命令を記録して、石に刻んで建ててみたり、紙に書いて貼ってみたりする。

親族名称  
最初に科学的研究を行ったのはアメリカの人類学者ヘンリー・シモガン、インディアンの土地問題でネイティブアメリカン、イロコイ族の名称を引き寄せ、その独特の制度に魅了されたことを機に1971年『人類の血縁と姻戚の体系』を出版。親族名称からなる社会の発展形態を再構成しようと試みた。



日記・日々の出来事や感想などを日付入りで綴った記録のこと。個人の内面を吐露するために書かれることも多く、随筆と並ぶ自伝文学の一つといわれる。

歌垣・男女が互いに歌を掛け合う集いのこと。『万葉集』にも記録が残されており、奈良・平安時代には儀式化されたが、明治時代に入ると廃れていった。

詩・一定の韻律で美的感動を表した文学形式の一つ。民謡が起源とされるが、その後朗詠や吟詠の形をとり、近年では定型を廃した自由詩・散文詩が盛ん。

散文・韻律や字数などの定型のない文章のこと。小説・随筆・日記などに用いられる。詩情に乏しくまとまりのない様子を「散文的な」と表現することもある。

小説・自由な方法とスタイルを用いて人間や社会についてを描いた文学の一形式。坪内逍遙が『小説神髓』で「novel」の訳語として用いたのが始まり。

文字の個人化

このように文字は、もともと行政目的で使われた「公共のもの」でした。「今日こんなことがありました」などと個人的なことを書くのは、文字の正しい用法ではなかった。

ですから、個人が文字を使って自分のことを書き始めたこと、つまり文学の誕生は、革命的な変化なんです。言葉は大勢のために生まれたものだけれども、その性質をうまく使えば、個人の精神活動を他の人にわかちあってもらえる。伝えられる。そのことに人々が気がついた瞬間、世界はものすごく広がりました。

文学の世界では、小説よりも散文よりも、詩が先です。

本来、詩は大声で歌うものでした。日本古代の歌垣もそうです。もちろん、日本に限らず世界中で「私は〇ちゃんが好きです。こっちは向いてよ」とか、みんなが集まっているところで歌っていたわけですよ。歌詞にはだいたいのパターンがあって、「△△村」や「××山」などといった地名を入れ換えて、使い回していました。個人的なものか公共的なものか、ハッキリしないものだったんですね。個人的な心情を歌ってはいるけれども、大体TPOがあつて、こういう状況だからこういうものを歌うんです、というものがやたら存在していた。

そうした詩がだんだん洗練されて、文字に記録されるようになった。はじめ文字は、ただ歌われている詩を記録するだけでした。やがて「誰それの歌」と、個人の名前のついた歌も詠まれるようになった。その流れで、歌の詠まれた状況を説明する「詞書き」というものが生まれる。状況を詳しく述べれば、歌も興行きが出てくる。その工夫が微に入り細

を穿っていくうちに、非常に洗練された文学である『源氏物語』も出来上がったのです。『源氏物語』では、歌は飾りて本文が前に出てきている。そうした本文が、のちの散文につながっていききました。人々が日記を書き始めたのは、西欧では宗教改革の後からです。それまでは、宮廷の役人がただ毎日起こったことを書いていたようなものしかありません。自分の心を見つめて、日々記録し、チェックするような日記は、宗教改革以降に現れます。最近ではインターネットも登場して、いくらでも文字を書いて保存できるようになりました。自分が読める量よりも、はるかに多い言葉が存在していて、理解しきれない。ポルヘスの小説に、『バベルの図書館』というのがあります。過去に出版された本はもちろん、これから出版されるはずの本もすべて収まっているという、巨大な図書館です。インターネットはバベルの図書館のようなもの。ますます世界は複雑になってきていると言えるでしょう。



宗教改革 ドイツ人ルターによる階級批判（1517）が教皇位を世俗化、聖職者の階級などを信

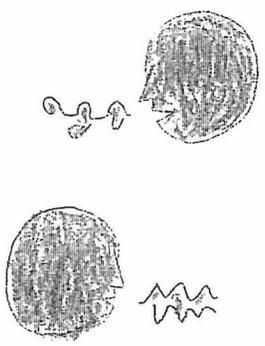


『バベルの図書館』 Jorge Luis Borges 『La biblioteca de Babel』 ポルヘスが1941年に執筆した世界文学を築いた傑作の『一編』。高次元を表現可能なあらゆるものが収められた出口のない図書館が舞台で、そこにはすべての問題に対する解答が必ずあるといわれる。

言葉はなぜ変わるのか？

みんなが使っている言葉が「正しい」

「言語ゲーム」ということを踏まえて、私たちはどのように言葉に接すればいいでしょう。言葉とは「気が付いたらそうなっている」ものだと言いました。別の言い方をすれば、「みんながそう使っているからそうなっている」ものでもあります。みんながそう使わなくなれば失われてしまう。歴史の中で消える言葉もあれば、生まれる言葉もあります。



いつの時代も「美しい言葉をしゃべろう」と主張する人がいます。この主張にまったく賛成というわけではありませんが、私もこの問題について、言いたいことがあります。たとえば、新聞の漢字の問題。日本語をどう書くのが正しいかという問題です。漢字は数が多いので、小中学校で習う漢字以外を使うべきでないという考え方があります。でもそうすると、漢字で書けない言葉が増えてしまう。新聞はどう対応しているかというと、ひらがなにします。さもないければ、別の漢字に置き換えてしまう。どっちもひどいと思います。たとえば、たまたま最近読んだ新聞に「い縮」と書いてあって、何かと思ったら、「萎縮」のことだった。「萎縮」と書く場合もあるでしょう。「い縮」では、何のことかわからない。かといって、「萎」は人に頼むという意味で、「萎」は草がしおれるという意味です。「萎縮」は「しなびて小さくなること」だから「萎」でないといけないのに、「萎縮」と書いたのでは、まったく意味が通らない。

もとの漢字を知っている大人はいいのですが、子どもが初めて見ると、こういうものだと思いませんか。これは困る。こういうのは正しくない、美しくない日本語だと思いませんか。このレベルの間違いはたくさんありますが、長い間みんなが使っていると、間違っているものも正しくなってしまうのが言葉なんです。

「新しい」も、本当は「新（あら）たい」ですね。きっと誰かが間違えたのだから、間違えれど、これはもう間違っているとは言えなくなりました。言葉の根本は、「みんなが使っているものが正しい」なのです。ごく少数の人々が間違えた使い方を始めた場合、多数の側が「それは間違っているよ」と言う権利はある。でも、間違った使い方をする人々が多数派になってしまうと、もう間違えとは言えなくなる。だから

漢字 1981年10月に内閣告示第1号で示された「常用漢字表」に掲げられている漢字1945字を常用漢字として、一般の社会生活において使用する漢字の目安とされている。漢字に5万字以上あるという漢字の数を制限しようとする動きが以前からあり、1946年に新聞・雑誌等で扱われる漢字を18000字と定め（当用漢字）、1947年、それでは表現できない漢字があることがわかり、95字を新たに追加して現在に三

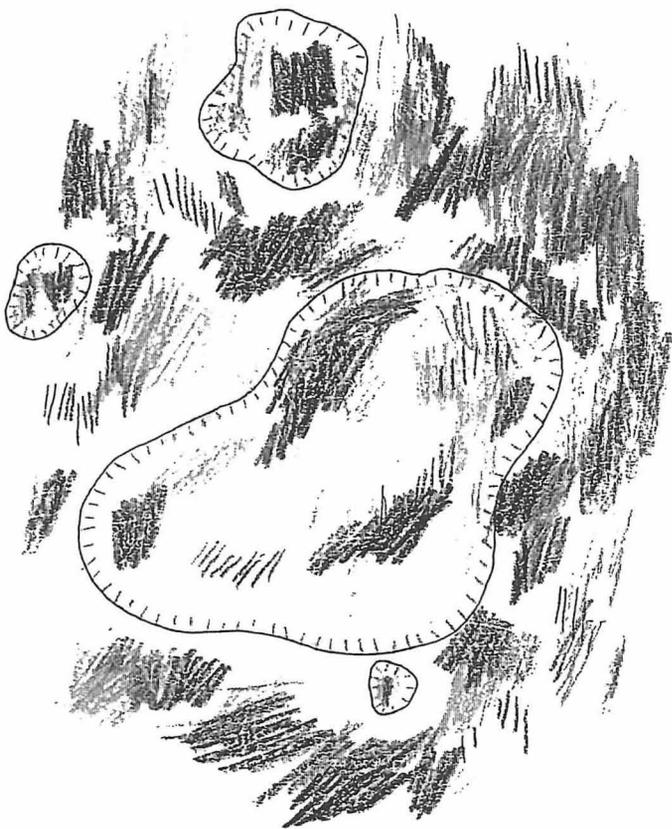
らこそ、わざわざ間違った使い方を始めて、言葉の意味をわからなくするようなことは、やめたほうがいい。とはいえ、言葉はそうやって、ときどきリセットされるものなのです。言葉は、社会とともに形を変えるもの

言葉は人にわかってもらわないと、言葉としての役割が果たせません。だから、たいいてはみんなにわかるように、「みんなが使っているもの」を使うことになりま。ただ言葉は、「みんなのもの」であると同時に「個人のもの」でもあるんですね。

どんな言葉も表現ですから、このときだけ、私だけの「どうしても言いたいこと」があつて、それをこの一回だけのために言っている。ときには「みんなはこう言うかもしれないけれど、このとき私はこう言いたかった」という場面もあるでしょう。その言い方はちよつと文法外れになるかもしれない。けれど、そういう独自の言い方も含まれていいのです。言葉づかいはどんなに個人的であつていいし、それは尊重されなくてはいいけない。

もちろん、何から何まで自分の個性に頼って言葉をしゃべろうとすれば、ただの「ぶつぶんおじさん」になってしまう。言葉をしゃべっているとみなされません。ルールを守りながら、その合間をぬって、うまく個性をもぐりこませる必要があります。そうした表現の積み重ねによって、やがてルールが崩れたり変わったりすることもあるでしょう。でも、ルールが変わることは、言葉にとって活力の源泉となるのです。

言葉は、社会の中でいつも形を変えていきます。言い換えれば、「正しい言葉」ではない言葉が生まれることも「言葉」なのです。若い人々は、上の世代がすでにこしらえた社会に生まれてきます。そういう社会の中で、



三 言葉はなぜ変わるのか

ポップカルチャー (pop culture) マンガやアニメ、ゲーム、ポップ・ミュージックなど主に若者に向けた、軽めとも抑論されがちな大衆文化のこと。

マスカルチャー (mass culture) 大量生産・消費を前提とする画一化された大衆文化のこと。ハイカルチャーに対し低俗な文化とする考え方が強い。

彼らはどう感じるのか。たいいては上の世代の人々を、「なんて鈍感なんだろう」とか「古いシステムにしがみついている」などと批判的に見ます。そして、自分たちだけに感じられる新しいものを表現するために、自分たちだけの新しい言葉をつくりま。

これは最近始まった現象でなく、昔からそうなのです。明治中期頃には「言文一致」の運動がありました。当時手紙は俥体で書いたものでしたが、言文一致運動のおかげで「ですます体」が変わっていきます。現代ならマスカルチャーやポップカルチャー、マンガやインターネットなどが、新しい言葉の生まれる場所と言えるでしょう。携帯電話のメールやチャットが普及する中で、これまでになかった言葉づかいが次々に生まれていきます。制約の中から新しいものが生まれてくる。そして、たちまち古くなる。そうした動きが、5年10年周期で次々に起こっている。言葉の形と社会とは、連動して変わっていくということがわかります。

二つの言葉の間で起きていること

次に、言葉と言葉の関係について考えてみましょう。言葉が違えば、世界の切り取りかた、世界を分節する仕方も違います。たとえば日本では、クジラは「鯨」と書きます。魚の一種ということになっている。だから「魚なのに食べて何が悪いか」と思う。けれども西欧では、哺乳類と分類しているから、「食べてはいけない」と考えるようになった。両者の価値観が違うということであつて、どちらが正しいわけでもない。言葉が違うということは、価値観が違うということなんです。ではなぜ、価値観が違う二つの言葉を「翻訳」できるのでしょうか。

言葉というものは、なぜか皆同じ構造を持っています。どういう仕組みかというと、まず、名詞や動詞、形容詞などの品詞がある。それから文があつて、主節と従属節があつて、接続詞もある……。枝葉の細かい部分ではもちろん違いがありますが、基本的な骨格はどの言葉も同じです。そのほかに、多くの言語に共通する特徴がかなりある。

言葉の基本構造は、なぜ同じなのでしょう。その答えとして、「人間の脳(ハードウェア)がみな同じだから」という有力な説があります。言葉は、脳のハードウェアの上に載っている。ということは、どの言葉もハードウェアに制約され、同じような構造にならざるを得ないのかもしれない。言語学者のチャムスキーの考えも、この説に近い。彼は、すべての言葉の根底には普遍文法があると想定し、そこに人間の生まれつきの制約が反映されていると考えました。したがって、ある言葉が別の言葉に翻訳できるのは、構造が同じだからだ、ということになります。そして、共通の基本構造からはみ出るところは、言葉ごとに独特なので、必ずしも翻訳できない。

たとえば、「雨が降ってきたので傘をさしました」という日本語の文を英語にどう訳すか。翻訳というのは、だいたい似たようなことを言っている、それでよいのです。はじめに「雨が降る」という意味のことが書いてあり、そのあとに「傘をさす」という文を続けて、それが順接の接続詞で結んであれば、翻訳としては完璧。あとはどうでもよいのです。日本語では、雨が主語になりますが、英語では「It rains」と非人称になる。そういうことは気にしないでいい。こういうルールをわかってしまえば、翻訳は簡単です。では、原文と翻訳は、同じことを言っているのか。それはわかりません。同じか違うかを言うためには、英語と日本語に共通の基準がなくてはいいけない。でも、共通の基準のよ

三 言葉はなぜ変わるのか

言文一致(一) 文章を書く際の書きかたを、日常語を用いて口語体に近づけて書くこと。日本語の古典的な文体である漢文は平安時代までに完成したとされるが、その後、話し言葉との乖離が

大きくなっていた。二葉亭四迷に代表される『浮城物語』などは言文一致の作品として有名。小説のみならず、新聞や雑誌などでも進んで言文一致体がとれ、明治末頃には書き言葉として確立した。

普遍文法 中世から近代にかけて用いられた文法体系の一つで、改革された形式をとる必要がある場合、文法に丁寧語の助動詞である「(to) do」を置く。鎌倉時代にはほぼ成立し、明治時代までは普遍的に用いられたが、言文一致の普及などにより廃れたとされる。過去形と終止形の区別がないなどの特徴もある。

普遍文法 Universal Grammar チャムスキーが提唱した生成文法における概念で、ヒトに固有で普遍的な言語の初期状態を指す。人間の脳には言語を獲得するための基本的な原理(文法)が埋め込まれており、どんな言語を使う場合でも、それによって習得がなされるという。これにより言語学に大きな変革をもたらした。

